

髄液14-3-3蛋白陰性のCJD・陽性の免疫介在性脳症の 臨床的比較

研究分担者：埼玉医科大学総合医療センター神経内科 野村 恭一

sCJDにおけるMRI施行までの期間と脳脊髄液検査の関連

症例(年齢/性)	症状出現からMRIまでの期間(月)	髄液14-3-3蛋白	髄液総tau蛋白	RT-QUIC
1. 69/M	-2	+	+	+
2. 69/M	0.5	ND	ND	-
3. 72/F	0.5	ND	ND	ND
4. 77/F	0.5	-	-	+
5. 72/M	1	ND	ND	ND
6. 63/M	1.5	+	+	+
7. 88/F	1.5	ND	ND	ND
8. 75/M	1.5	ND	ND	ND
9. 56/M	2	+	+	+
10. 67/M	2	+	+	-
11. 70/M	2	+	+	+
12. 70/F	2	+	+	+
13. 74/F	2	+	+	-
14. 84/F	2	+	-	+
15. 85/F	2	-	+	+
16. 49/F	2	+	+	+
17. 67/F (本例Case1)	0.5	-	+	-

解 説

- 髄液14-3-3蛋白疑陰性のCJDと、疑陽性の免疫介在性脳症を経験した。
- 症例1は67歳女性、3ヶ月で無動性無言になった。発症から0.5ヶ月時に施行した頭部MRI(DWI)では尾状核と皮質に高信号を認めたが、髄液14-3-3蛋白とRT-QUICは陰性であった。
- 症例2は78歳男性、幻覚妄想、半側空間無視が出現した0.5ヶ月時に施行した頭部MRI(DWI)で右頭頂後頭部皮質に高信号を認め、髄液14-3-3蛋白・総tau蛋白ともに陽性であったが、ステロイドパルス療法で症状は改善した。
- 表は本邦の多施設におけるMRIの検討である。MRI施行までの期間が短い場合でもQUIC法は陽性になりうる。
- CJDの診断は包括的に行われる必要性があることを再認識した。